部活動「人体研究部」
女子は体力・運動神経が高いものが多く、所属する部活動でも上位の成績を撮っているものばかりである。
主な活動は人体のことを勉強すると称して、男子たちを虐めている。
今日やっているのは顔面騎乗を行ってどれだけ長く座っていられるかを競っている。失神させると＜記録なし＞となってしまうので、いかにギリギリまで座っていられるかが勝負のカギとなる。通常２－３分で失神してしまうので早く男子の限界を見極めることができるかが勝利の近道。

ルール説明
〇顔面騎乗ゲーム
男子１人、女子２人で１チーム。３チームで試合を行う。
手足を拘束し、顔をsmother boxで固定した男子女子が１人ずつ顔面騎乗を行い長く座っていた方のタイムを記録として扱う。１ゲームごとに女子が座っていたタイムが一番長いチームに３点、男子が一番長く耐えたチームに１点得点が入る。

作戦１
女子２人それぞれが限界まで我慢させる。同じチームの男子はいつもやっているので限界は分かっているが、他のチームや大会で他校の男子の限界は分からないため、失神させないよう注意し、相手の癖や限界を観察し出来るだけ長く座っているようにタイムを狙う。
１回目と２回目、大会だと１日何度も窒息させられ男子は弱っていき徐々に記録は短くなっていく。いつもなら大丈夫だった呼吸管理の時間も失神してしまうこともある。
そのため、過去にゲームをやったことのある相手に多く使われる戦法となっている。

作戦２
２人のうち時間が長い方を１ゲームの記録とするルールを逆手に取り、１人目の女子がわざと失神するまで窒息させ２人目で先ほどより少し短い時間まで座ってギリギリ失神しないタイムを狙う。１人目が失神を狙うため、２人目は男子の様子を観察するのに集中する。手足の状態、限界に近い時の痙攣や手足の癖の確認、失神するまでの時間。
２回目の窒息となるので若干耐えられる時間も短くなる可能性があるため、２人目も＜記録なし＞になる可能性はあるがこちらの作戦の方がタイムが良い傾向があるので、多くのチームはこの作戦を用いている。

男側
男子部員は強制入部させられたものばかりであった。学校の成績が悪かった人、素行不良で生徒会に目をつけられた人が半年ごとに入れ替わっていった。
練習ではずっと窒息責めを受け、限界を確認させるため何度も失神させられる。同じチームだが競技としては男子を徹底的に痛めつけるものでチームワークというよりも女子にどれだけ命乞いをして手加減してもらうかをずっと考えてしまう。

〇失神ゲーム（首四の字部門、スリーパー部門）
男子１人、女子１人で１チーム。お互い女子は相手の男子に首四の字やスリーパーをかける姿勢をとってからカウントスタート。ランダムで決められた時間（10秒、30秒、1分）に近い時間で男子を絞め落とす。
指定時間に近いタイムで失神させた方が1ポイント。次は自チームの男子を絞め落とす。
先に2ポイント取った方が勝利。２回戦で決まらなかった場合、延長戦で自チームの男子で先に２ポイント差をつけたチームが勝利。
（２回戦で決まらなかった場合、最短で２連続ポイントを取れば勝ち）

・作戦
ゲーム中は時計が無いため、指定時間を正確にカウントする能力。
女子が思い通りに絞め落とせるように時間に向けての調整能力。
相手の男子の特徴を見極めて確実に落とせるようになること。

最近では、どうしても相手の男子は初めて絞める相手の場合がほとんどなので、延長戦ばかり行われていた。そこで、ゲーム前に男子を交換して５分間の公式練習が導入された。
そこでは相手男子の失神しやすいポイントを探したり、なるべくたくさん失神させて落ち癖をつけたりしている。

男側
男子は公式練習から手足を拘束され、女子に差し出されるような形となっている。逃げることは決して出来ず、相手チームの女子に絞められているときは少しでも長く耐えて落ちないように我慢する。反対に自チームの女子に絞められているときは協力して時間が近づくと力を抜いてすぐに落ちられるようにする。
絞め落としは何度やれても辛い。特に公式練習が導入されてからは相手チームから執拗に絞められて落ち癖が付いてしまうときがある。連続で５回落とされたりしたこともあった。

本編

１．入部
「ご入学おめでとうございます。これからの学生生活で多くを学び、皆様の輝かしい未来への礎となる事を心より祈念致します。」

僕は都内のとある私立高校に入学した。勉強もスポーツも実績のある大学付属の名門校であった。女子大の付属で元々女子高ということもあってか男子は全校で３分の１の人数で女子の方が多かったが特に気にすることもなかった。むしろ女子と話したり友達になったり恋愛したりとリア充生活を夢見ていた。
今時珍しい全寮制の高校で、全員学校の寮で学生生活を送る決まりとなっていた。寮は部活動ごとに決まっていて、運動部から文化部まで全て部室と共同の部屋を与えられていた。部活動は全員入部する決まりとなっていたため、僕も中学からやっている柔道部に入った。あまり運動は得意な方ではなく、体も小さかったのでいつも負けてばかりだったけど楽しかったので高校でもやろうと決めていたためだ。

入学してから知ったのだが、入学テストの成績で下位の男子生徒はある部活に強制入部という決まりがあった。僕はあまり頭がいい方ではなかったのでギリギリこの高校に合格できた方だったので、入学時は最下位となってしまったため入部することになった。入寮する手続きがあった時、先輩たちに半年ほど兼部するかたちになると伝えると、皆哀れみの表情で
「頑張れよ・・・」
とか
「生きて帰ってこいよ・・」
と励ましてくれた。そんなに今から行くところは恐ろしい所なのか・・・

次の日、授業が終わり学校内の部活棟にある指定された場所に行った。部室も同じ建物だが、地下にあり、他の部活動から隔離されているかのように感じた。

＜人体研究部＞
部室の入り口には小さく書かれていた。おそるおそる扉を開けると中には何人かの生徒がいた。多くは女性でまだ始まっていないが準備運動っぽいことをしていた。
「男子はこっちでーす。」とどこからか言われてそこに向かった。男子たちは一か所に固まっており、１年から３年まで合わせて６人いた。
やがて部活動の時間となり、部員全員がそろった。女子の人数は多く男子たちを圧倒していた。部活動の時間になると、みなウォーミングアップを始めた。３年の女子の部長が男子たちが集まっているところで、
「今日から新学期で新しいメンバーになった人たちね。１年生の子は、初めてね。
私は部長のリエです。よろしくね！」
挨拶からリエは、＜人体研究部＞の活動内容について説明していく。

＜人体研究部＞は、男子は定期テスト・入学試験で各学年下位２名が強制的に入部させられ、定期考査ごとに入替がある。また、今日はいないが生徒会が選んだ校則違反をしたものや風紀を乱したものが各学年１名ずついる。男子は強制入部の計９名が入れ替わり所属している。半年間は退部が許されず、また半年後のテストで下位２名の人と入れ替わりとなる。
一方女子は、多くの人は運動部と兼部しており、スポーツ万能な子が多かった。各学年で１０人、合計３０人所属している。
どのような活動をしているかというと、表向きは文化部で　”トレーニングや体の動かし方を研究し、自身のスポーツ技術の向上を図るための勉強会”　といった部活であったが、
実際の活動内容は男子を虐めるための部活動で、この学校が女子が優位であることを示すために見せしめで行っていた。成績が下がったり生徒会に目をつけられたりしなければいたって普通の高校生活を送ることが出来る。

この活動におかしいと抗議したり、SNSで投稿したりする男子もいたが記録が消去されていたりなかったことにされるだけでなく、本人はもちろん無作為に見せしめとして何人かの男子が強制入部させられ徹底的に痛めつけられる。あまりにも壮絶で毎年１人は行方不明となっているらしい。事故死ということで片づけられるので世間は誰も知らない。告発すれば次は自分かもしれないのだ。

２．グループ決め
自己紹介もそこそこに、リエ部長は事務的に話を進めていく。
「じゃあ、まずはチーム決めしようか。基本的には半年間はチームで練習したり、試合するから仲良くすることね。」
チームというのは男子１人、女子２人で組み、試合はもちろん普段の練習もこのメンバーで行う。ランダムで学年が違うようになるよう組まされたので、僕の場合女子は２年生、３年生のメンバーだった。
全員が決まったところで、部長は女子たちを呼んだ。丁度ウォーミングアップを終えて少し顔が紅潮した女子達が集まってきた。女子はタンクトップにショートパンツやミニスカートとチアリーダーの練習着のような格好をしていた。学生らしい健康的な肉体を見せつけてくる。モデルのような体型というよりアスリート体型に近い子たちばかりで、ここに連れてこられる身長が低く、ガリガリの男子達よりも身長も高く、体格面でも男子達に負けず恵まれている子ばかりだった。
男子たちは順に部長に指示された女子チームのところに向かって行く。僕も言われた所へ行くと、２年生と３年生の女子がいた。２年生のメグミ、３年生のカナは２人とも＜スケート部＞に所属しており、冬はスピードスケートを専門にやっている。オフシーズンは＜人体研究部＞で活動していた。

「見た感じ小さくてガリガリだけど私たちの練習についてこれるかな～？楽しみだね。」

メグミは赤色のタンクトップに黒色のショートパンツを履いていた。カナは青色のTシャツに黒色のショートパンツを履いていた。スピードスケートをやっているためか他の人よりも下半身は逞しかった。

「見て、私たちの太もも。君の胴回りよりも大きくない？それとも君がガリガリ過ぎるかな？」

２人は僕に太ももを見せつけてくる。太ももだけでなく、お尻も大きく、腕もムッチリとしていた。このとき全てにおいて勝てないないなと思わせる２人だった。
やがて部長がこれからの練習の号令をかけた。

「じゃあチームに分かれたところで、まずは男子たちの実力を測りましょう。」

号令と同時に女子たちは男子を囲み、一斉に襲い掛かった。２対１で囲まれ、最初は抵抗していたが力の差は歴然であっという間に組み敷かれた。僕も例外でなく柔道を知っているからとかいうレベルではなく運動能力差が能力差が全然違っていた。

あるチームは男子にマウントポジションでビンタする。吹き飛ぶくらい強烈なビンタをくらうが体を固定されているためすぐに次の打撃がくる。めった打ち状態であった。
別のチームは女子２人がかりで尻で男の顔とお腹を圧迫責めで潰す・・・・
女子たちはその運動能力をもって、男子たちを虐めていた。男子たちの悲鳴と絶叫があちこちから聞こえてきた。

僕は２人がかりであの凶悪な太ももによる胴締めを掛けられていた。僕はお腹を潰されて悲鳴すら出せなくなっていた。呼吸も満足に出来ない・・・

「カハッ・・・ク・・ル・・シ・・イィィ・・カヒュー・・・」

僕は必死にギブアップの意思表示をするが無視された。

「辛いよね。こんな太ももで絞められたら。早く逃げないと死んじゃうよ。ほら、頑張れー！」

僕は脱出しようとするが、鋼のように固くなっている太ももには指１本入れる隙間も無かった。２人は交互に力を入れて悲鳴を上げさせたり、失神はさせないよう窒息寸前で力を緩めたり、ゆっくり力をこめて恐怖させたり、とあらゆる方法で僕を虐めてきた。

・・・・・・・・

３０分くらい経過し、部長が終了の合図を出す。

「そろそろ終わろうか。男子たちも逆らう気がなさそうだしね。」

男子たちは虐められる中で衣服をはぎ取られ全裸にさせられていた。

「男子たちは正座。女子に向かって土下座しなさい。少しでも反抗しようとする態度だったらまた虐めるよ。」

部長のその言葉に男子たちは額を地面につけて同じチームの女子に許しを請う。部長のリエは、虐めていた目の前の男子の顎をグッと引っ張り無理やり顔を上げさせた。彼は２人から交互に絞め技を受けて何度も失神させられていた。
首四の字、チョークスリーパー、三角絞め・・・
落ちるたびに２人は交代して何度も絞め落とした。彼は終わるまで１０回以上落とされていた。今ではリエが動くだけでガクガクと震えていた。
「ボコボコにされて全裸にさせられて悔しくないの？めっちゃ震えてるけど何もできなかったくせに何で？」
あれ？っとリエはふと気が付いたように、男子の下半身に足先を伸ばす。あんなにひどい目に遭ったはずなのに股間は大きく膨らんでいたからだ。
「虐められてたのに反応しちゃってる・・・」
子馬鹿にしてクスッと笑うリエ。男子はとっさに手で隠してしまう。
「手を動かしていいって言ってないよ。手をどけて」
「やだ・・・・だめ・・・」
「どけてって言ってるの。早く！」
リエの圧力に負けて、手をどけてしまう。なぜか先ほどよりアソコは膨らんでいた。
「アゥッ・・・アッ・・・ヒグッ・・・許して・・・ください・・・」
男は泣き、必死に許しを請う。土下座をしようとしている。
「だーめ。君は不合格で次の練習にも残ってもらうから。」
そう言うとリエとペアを組んでいたサチはその男子を無理やり立たせて引っ張るように準備室に連行した。男子は泣きじゃくりながら拒絶しているが聞き入れてもらえなかった。
「他の子も勃起してるんじゃないの？みんな確認して。」
僕を含めて他のチームの男子も次々と勃起しているものが見つかり、結局大丈夫だったのは２年生の男子1人のみであった。
「君はやるわね。特別に次の練習は今日は免除してあげるわ。その代わり途中で勃起したらすぐ練習に戻ってもらうわ。」
同じチームの女子たちは不満そうだったが部長の言葉に従う。２人は男子のそばで逃げ出さないように立っている。